

## 精神障害者におけるストレングスの状況 —就職活動期に入る大学生との比較における研究—

黒須 依子

The strengths of people with mental illness  
—A comparison with those of university students searching for jobs—

Yoriko KUROSU

### Abstract

This study aims, first, to consider the strengths of people with mental illness, and then to find out some essential factors that would make it easier for them to live in the community, without impairing their strengths. Several questionnaire-type surveys were carried out on university students' strengths during their activities of job-seeking. The data were analyzed by the Grounded Theory Approach and compared to the same kind of data on a group of people who have mental illness but live in the community and are supported by day-care services offered by public health-care centers. The first result shows that as to the strengths of people with mental illness living in the community, factors of environmental promotion are few and factors of environmental oppression tend to restrain factors of individual promotion. The second result shows that as to the strengths of university students during their activities of job-seeking, factors of environmental promotion tend to restrain factors of individual oppression but to promote factors of individual promotion. These suggest that informal social resources (e.g. friends or peers) are very important for people with mental illness living in the community.

**Key words :** Strengths, Grounded Theory Approach, people with mental illness living in the community  
**キーワード :** ストレングス, グラウンデッド・セオリー・アプローチ, 地域生活を送る精神障害者

### 1. はじめに

1990年代以降、日本の経済的不況の影響を受け、大学卒業生の就職率が急速に低下してきている。文部科学省による「学校基本調査」によると、1991年の81.3%から2003年度には55.0%と、大学卒業生の就職率はおよそ10年の間に30%近く低下している。香山は『就職がこわい』という著書<sup>1)</sup>の中で、経済状況が多少上向きになってきたにも関わらず「どうせダメなんだから」と自己否定し就職から身を遠ざけようとする一方で、「何とかして自分

らしさを表現することができる場に就職したい」という気持ちを強く持つ現代の若者の二重の心理構造を指摘している。そして、現在の大学生が就職先をなかなか決定できない原因として、彼らが自身の価値観に対し自信を失っていることや、彼らが自分自身に対する社会の自己肯定感を求めて就職先を決めようとしていること等を挙げている。実際に筆者も「自分に合った仕事がしたいが、自分にどんな仕事に向いているのかわからない。そのため、就職希望先が定まらない」といった相談を学生より受けたことがある。

この香山が述べるような大学生の状況は、筆者がこれまで研究の対象としてきた「地域生活者としての自信や自己意思表出意欲を喪失している精神障害者」の状況と類似しているように考える。つまり、香山が述べる「自信を失いながらも、社会からの自己肯定感を求めて就労の機会を待つ就職活動期の大学生のストレングスの状況」と、筆者が前研究にて考察した「就職することを日常生活の主な目標としながらも、目標達成のための活動をほとんど展開せずに日常生活を送っていた精神障害者のストレングスの状況」とには、共通点が見出せるのではないかということである。

ストレングス (strengths) とは個人または集団がもつ能力 (capacities)、資源 (resources)、強み (assets) を代表する言葉であり<sup>2)</sup>、1980年代よりソーシャルワークにおいては「ストレングスの視点 (strengths perspective)」という援助観として活用されている。例えば、コウガー (Cowger, C.) は「クライアントのストレングスは、エンパワーメントのための燃料であり、エネルギーである」<sup>3)</sup> と述べている。

しかしながら、大学生の多くは、内定の時期、希望の職に就けたか否かに差はあっても卒業式までに就職先を決めている。一方、精神障害者は「就職」を目標としながらもなかなか定職に就くことができず、精神障害者の就職率は非常に低い。そのために授産施設等の福祉的就労の場に長期に渡り通う者が多い。

このように大学生と精神障害者の就職率に相違が生じる理由は、精神障害者に比較し大学生が精神的、身体的に健康であるということ、精神障害者に対する就労支援制度が整備されていないことに限定されるのだろうか。

そこで筆者は本研究の目的を、前研究結果として分析した精神障害者のストレングスの状況と就職活動期にある大学生のストレングスの状況とにおける相違点を認識することにより、地域生活を送る精神障害者のストレングスの特性を見出し、精神障害者が自身のストレングスを十分に表出して地域社会で生活していけるよう支援していくために要する新しい知見を考察していくこととした。

## 2. 前研究「精神障害者のケアマネジメントの現状と課題～地域生活を送る精神障害者のストレングスの状況～」の方法と結果

周知のように、日本では介護保険制度に高齢者福祉サービス提供システムとしてケアマネジメントが導入されて5年目に入った。現在、種々のケアマネジメントモデ

ルが論じられ世界各国で様々な実践されているが、このうち精神障害者の地域生活支援に有効であるとしてアメリカで誕生したケアマネジメントモデルにストレングスモデルがある。ストレングスモデルは、1990年代にC.ラップ (Charles A. Rapp)<sup>4)</sup> により提唱されたサービス提供者主導モデルの一つである。このストレングスモデルの特徴は、人および環境の存在そのもの全てを肯定的に捉える視点を重視し、それらの中に存在する強さを活用し支援活動を行っていくモデルである。その理念は、個人のもつ熱望、能力、自信というストレングスの個人的要因と資源、社会関係、機会というストレングスの環境的要因の相互作用によって、個人の生活空間の質が決定するというストレングス理論に基づくものである。

前研究<sup>5)</sup> で筆者は、2005年より日本で開始することが予想されていた精神障害者ケアマネジメントにおいて、クライアント主導モデルを維持、継続していく上でストレングスモデルを導入する意義を考察することを研究の目的とした。その一方法として日本で地域生活を送る精神障害者のストレングスの状況を次の方法を用いて把握した。その経過と結果の要約を以下に記す。

### (1) 調査対象者

調査対象者は福岡県A保健所デイケア利用者12名 (男性9名、女性3名) であり、年齢は25歳～53歳、統合失調症9名、うつ病2名、てんかん1名であった。

### (2) 研究方法

研究方法は非構造的面接方式による聞き取り調査法を用い、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach: 以下、GTAと記述する) を用いてデータ分析を行った。前研究の方法を紹介する前に、まず前研究、本研究の両者で用いたグラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) の概要を紹介し、次に前研究の方法を記していく。

#### ①GTAの概要

GTAとは、アメリカの社会学者グレーザー (B.G.Glaser) やストラウス (A.L.Strauss) によって1960年代に考案された質的研究法の一つである。GTAの目的は研究対象となるその現場に対して正確で、その現場を照らし出す理論を構築することにある。

また、GTAには他の研究方法と異なる6つの特性がある。第一の特性は、抽象的内容に照らしてデータより具体的ことがらを比較し、その類似点や相違点から新しい発想や着想を活性化させていく点である。第二の特性は、研究対象とする現象特性にプロセスの特性が存在している必要がある点である。第三の特性は、

その分析方法が①オープンコード化 (open coding:概念の生成)、②軸足コード化 (axial coding:概念間の相互関係の検討)、③選択コード化 (selective coding:概念の統合化) に具体化されている点にある。研究者は収集したデータの記録にコードをつけ、データをカテゴリー化し、さらにこのカテゴリーを要約して重要な構成概念をつくり、その作業を通し新しい理論を確立していく。第四の特性は、普遍的な知識を指し示す一般にいう理論の定義と異なり、GTAによって生成される理論は限定的に設定された範囲内におけるものであるという点である。よって、GTAは他の数量的研究法と比べ限定的に設定された範囲内に関する限り、他のどのアプローチによる研究法よりも説明的に優れている。第五の特性は、研究結果はその研究プロセスを通じて分析生成したコード (概念) とコード間の関係を説明的に報告する表現形態をとる点にある。最後に、第六の特性はGTAにて生成した理論の対象は絶えず変化する社会現象であり、生成した理論が応用される社会場面も二つとして同様のものはないという点である。よって、GTAにより生成した理論が他の場面で様々な人々により応用、検証されることによって、より社会的現実と密着した理論を導く可能性を高めるものであると想定される。

②調査方法

調査は平成12年8月1日～同年9月26日、1回/週のデイケアの時間 (10:00～15:00) に行い、データは録音し逐語録にまとめた。主な質問項目を表1に示す。

表1. 聞き取り調査での主な質問項目

個人的ストレングスの状況	
① 日常生活で目標としていることがありますか。	
② その目標について教えていただけますか。	
③ 目標を達成するために何かしていることはありますか。それは、どんなことですか。	
④ その目標はいつか達成できると思えますか。	
環境的ストレングスの状況	
① どのようにしたら、その目標は達成に近づくとお思いますか。	
② その目標を誰かに伝えたことはありますか。自分の思や悩みを伝えやすいと思う方について教えて下さい。	
③ デイケアや作業所利用以外の時間は、日頃どのように過ごしていますか	

尚、データはGTAを用いて、第一次分析と第二次分析の2段階で分析した。まず、第一次分析では調査対象者それぞれの個人的ストレングス (3要因) と環境的ストレングス (3要因) の状況を把握することを目的とし、その方法は次の手順で行った。

手順1. 調査データより、ストレングスに関する言葉をすべて抽出する。

手順2. 抽出したデータを個人的ストレングスを表すものと環境的ストレングスを表すものとにカテゴリー化する。

手順3. 調査対象者一人ひとりが表出しているストレングスの状況を把握するため、3段階区分表 (表2) を用いて区分化する。

表2. スtrenグス状況の3段階区分

ストレングスの要因	質問項目	○	△	×
個人的ストレングス	① 目標を持っている。		表現が不明確	目標がない。
	② 目標に具体性がある。		-	目標が抽象的である。
	③ 何らかの活動を行っている。成長-成功思考		-	何の活動も行っていない。対処-生き残り思考
	④ 目標達成に自信がある。		表現が不明確	目標達成に自信がない。
環境的ストレングス	① 目標達成のために種々の社会資源を利用している。		-	地域の社会資源を活用していない。精神保健サービスに限定した資源を活用している。
	② 友人等の相談者が地域にもいる。		相談者は精神保健サービスのメンバーのみである	相談者がいない。家族または精神保健サービス関係の専門職が該当。
	③ 地域社会との接点をもっている。		-	地域社会との接点全くない。精神保健サービスに限定。

この結果を、表3に示す。

表3. 精神障害者のストレングスの状況

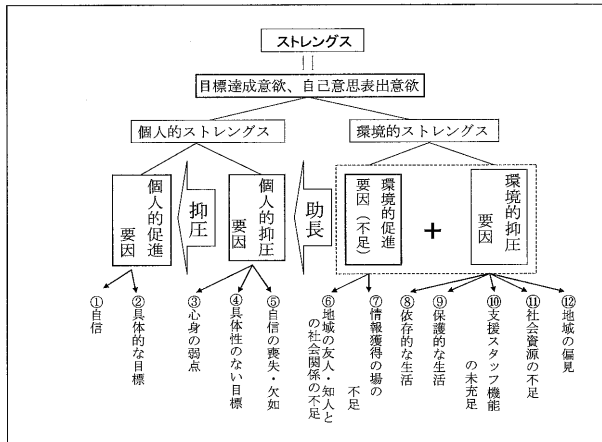
ストレングスの要因	調査対象者 質問項目	A B C D E F G H I J K L											
		○ △ × NA	○ ○ ○ ○ ○ △ ○ ○ ○ △ ○ △	○ × × ○ ○ × × ○ ○ × ○ ×	NA ○ ○ ○ × ○ × ○ ○ ○ ○ NA	NA × × ○ ○ × ○ ○ ○ × × ×	× ○ × × × × × × ○ × ○ ×	○ × × × ○ ○ ○ × × × ×	× × × × ○ × × ○ ○ × × ×				

NA: 無回答

前研究では、表3に示す結果から次の結論を得た。「地域生活を送る精神障害者は、個人的ストレングスの要因 (目標、能力、自信) の多くを所持しているが、環境的ストレングスの要因 (社会関係、資源、機会) をほとんど所持していない」

次に、前述のような事前に用意した理論的枠組のもとでの量的調査では調査対象者が実生活の中にも様々な思いや希望を見落としてしまう可能性が高いと考えた。そこで、第二次分析では人間の種々の問題を理解するための探求方法であるGTAを用いてデータの分析を行った。その中で、日常生活における調査対象者の目標達成過程に作用する要因を、上記の調査データを基に分析した。この結果を図1に示す。

図1. 地域生活を送る精神障害者のストレングスの状況



この分析結果より、次の結論を得た。

- (1) 精神障害者のストレングスは、目標達成意欲及び自己意思表出意欲として表れる。
- (2) I.目標(夢)、自信、能力等の個人的促進要因、II.不明確な目標設定、自信の欠如、依存性、心身の弱点や自己能力に対する偏見等の個人的抑圧要因、III.地域の友人、知人、仲間等の環境的促進要因、IV.社会サービス機能の未充足、社会資源の不足、保護的・指示的又は地域から閉ざされた個人の生活環境等の環境的抑圧要因の4要因間における相互作用が、精神障害者のストレングスの表出状況に影響を及ぼしている。このうち、III.環境的促進要因の不足、IV.環境的抑圧要因の存在がII.個人的抑圧要因を助長させI.個人的促進要因を抑圧しているために、精神障害者は社会生活の中で自身のストレングスを表出し難い状況にある。

### 3. 目的

本研究の目的は地域生活を送る精神障害者におけるストレングスの状況を再考察し、その結果により地域生活を送る精神障害者が自身のストレングスの表出を支援する上で地域社会に必要な要因を考察することにある。

前述のように前研究結果では限られた精神障害者を対象とした調査、考察に終始しており、その結果については再検討を要すると考察した。その検討方法の一つとして、筆者は地域生活を送る精神障害者のストレングスの状況と就職活動期にある大学生のストレングスの状況との相違点を認識することとした。その理由は、「就職」や「自立」という同じ目標をもつ地域生活者として両者を捉えた場合、両者のストレングスの状況(個人的要因、

環境的要因の状況)に表れる相違点を認識することにより、目標達成活動を展開するという各自のストレングスの表出に有効に機能する要因、又はその支援に必要な要因を明らかにすることができると考えたからである。また、その結果、精神障害者が自身のストレングスを十分に表出し地域社会で生活していけるよう支援していく上で、地域社会に要する新しい知見を見出せるものと考えた。

### 4. データ分析の方法

本研究の方法は、次の通りである。

#### (1) 調査対象

調査対象者を九州保健福祉大学、社会福祉計画学科の就職活動期にある心身共に健康な21~22歳の4年生12名(男性9名、女性3名)とした。

#### (2) 研究方法

聞き取り調査を平成16年5月6日~平成16年5月12日にゼミ室にて非構造的面接方式により行い、面接内容はテープに録音し逐語録を作成した。主な質問項目を表4に示す。

表4. 第一次分析における聞き取り調査での主な質問事項

1. 個人的ストレングスの状況 -----
①日常生活の中で目標としていることがありますか。
②その目標について教えていただけますか。
③目標を達成するために何かしていることはありますか。それは、どんなことですか。
④その目標はいつか達成できると思いますか。
2. 環境的ストレングスの状況 -----
①どのようにしたら、その目標は達成に近づくと思いますか。
②その目標を誰かに伝えたことはありますか。自己目標についての思いや悩みを伝えやすいと思う方について教えてください。
③大学で勉強する以外の時間は、日頃どのように過ごしていますか。

尚、データ分析はGTAを用い、第一次分析と第二次分析の2段階に分けて行った。第一次分析では、前研究方法と同じく調査データよりストレングスに関する言葉を抽出し、表5に示す3段階区分を基にデータのカテゴリー化を行った。

表5. ストレングス状況の3段階区分

ストレングスの要因	質問項目	○	△	×
個人的 ストレングス	① 目標を持っている。		表現が不明確	目標がない。
	② 目標に具体性がある。		—	目標が抽象的である。
	③ 目標達成のために何らかの活動を行っている。成長-成功思考		—	目標達成のための活動を何も行っていない。対処-生き残り思考
	④ 目標達成に自信がある。		表現が不明確	目標達成に自信がない。
環境的 ストレングス	① 目標達成のために種々の社会資源を利用している。		—	地域の社会資源を活用していない。又は、目標達成手段が自己学習に終始している。
	② 自己目標に関して相談できる友人・知人等が大学以外の地域にもいる。	相談者は、主に学内の友人のみである。	自己目標に関して相談できる友人・知人がいない。又は、家族や大学教職員が該当。	
	③ 地域社会との接点をもっている。	—	地域社会との接点全くない。大学関係者に限定。	

前述のように事前に用意した枠組のもとでの調査では、調査対象者各自がもつ実生活に対する様々な思いや希望を見落とす可能性が高いと考え、第二次分析ではGTAを用いてデータ分析を行った。具体的には前述のカテゴリー化した第一次分析の結果よりコアカテゴリーを見出し、各カテゴリー間の関係性を考察した。

## 5. 結果

### (1) 第一次分析の結果

第一次分析結果を表6に示す。

表6に記したA~Lのアルファベットは調査対象者で

表6. 第一次分析の結果「就職活動期に入る大学生のストレングスの状況」

ストレングスの要因	調査対象者 質問項目	調査対象者											
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
個人的 ストレングス	①日常生活の中で目標としていることはありますか	○	△	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○
	②その目標について教えていただけますか	○	×	○	○	○	○	△	○	×	○	○	○
	③目標を達成するために何かしていますか。それは、どんなことですか。	○	—	○	○	○	○	×	○	—	○	○	○
	④その目標はいつか達成できると思いますか	○	○	○	○	△	○	○	○	—	△	○	△
環境的 ストレングス	①どのようにしたら、その目標は達成に近づくとおもいますか	○	—	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○
	②その目標を誰かに伝えたことはありますか。自分の思いや悩みを伝えてやすいと思う方について教えてください	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○	○	○
	③大学の授業以外の時間は日頃どのように過ごしていますか	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○

ある大学生を表している。例えば、Aの個人的ストレングスについては、①自身の目標を持ち、②その目標に具体性があり、③目標達成のために何らかの活動を行っており、④目標達成に対する自信をもっているという状況を反映している。

また、Aの環境的ストレングスについては、①目標を達成するための具体的な手段を考案しており、②その目標を親や友人に伝えたことがある。③余暇は大学内の友人や教職員以外の地域との交流をもって生活していると

いう状況を反映している。

この結果を前研究結果である精神障害者のストレングス調査結果(表3)と比較した結果、両者の共通点、相違点として次の4点を見出した。

#### (共通点)

①前調査研究の対象である精神障害者と同様に、本調査対象である大学生の多くが「就職」、「自立」を日常生活の目標としていた。

#### (相違点)

①精神障害者の多くは具体的な目標達成手段を考慮、考案して生活していなかったが、大学生の多くはその目標が抽象的なものであったとしても、その目標達成手段については具体的に考慮、考案し生活していた。

②自己目標や日頃の悩みを相談する者として、精神障害者の多くは親やサービス利用施設等の専門職員を選択しているが、大学生は学友を選択している。

③日常生活における余暇を過ごす際に、精神障害者の多くは同じ利用者や地域の人々と接する場をほとんど所持していなかいが、大学生の多くは学友やアルバイト、ボランティア、地域のサークル活動等を通して地域の人々と接する場を所持している。

### (2) 第二次分析の結果

第一次分析結果より抽出した概念、カテゴリーを表7・表8に記す。また、表7・表8で抽出した概念・カテゴリー間の関係を図2に示す。

図2は、大学生がストレングスの環境的促進要因(地域のインフォーマルな社会資源等)を多く活用することにより、環境的抑圧要因(社会経験の不足等)が大学生の目標達成過程に及ぼす機能(抽象的な目標設定等)を抑制し、かつ、個人的促進要因が学生に及ぼす機能(学習等)を充足化させる、という就職活動期に入る大学生のストレングスの要因間の関係を表している。

図2に示すように、本研究の調査対象者である就職活動期の大学生がもつ日常生活の目標は「就職」、「親からの自立」及び「夢の実現」であり、その目標達成手段として「就職対策」、「目標達成のための知識の取得」等の「学習」、及び「目指す職種に対する友人、地域の人々との交流」により自身の目標達成意欲を高めていた。

第二次分析における前研究結果との違いは、自身の目標達成に向けた活動内容に見受けられた。その違いとは、精神障害者の多くは自身の余暇を自宅内で過ごし、他者への相談や他者からの情報の取得を含めた自身の目標を達成するための活動をほとんど行っていなかったことに對し、大学生は余暇を活用してアルバイト、地域のサー

クル活動、ボランティア活動等を通して地域との交流の場を主体的に設け、自身の目標に関する情報収集を行い、ほとんどの大学生が自身の目標設定に対して友人に相談していたことである。つまり、各自の目標達成のために身近な地域のインフォーマルな社会資源を精神障害者はほとんど活用していなかったが、大学生の多くはそれらを主体的に活用していた、という違いである。

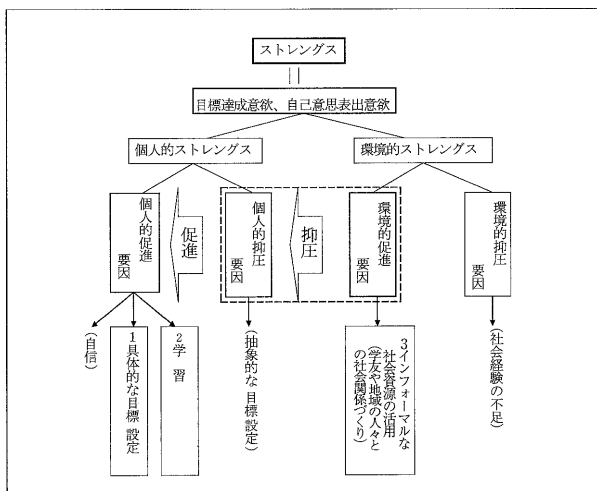
表7. 就職活動期に入る大学生の日常生活の目標

2次データ	概念
①親からの自立	a. 自立
②夢の実現	b. 自己実現
③人間性の向上	c. 人生の目標設定
④安定した生活	

表8. 就職活動期に入る大学生の目標達成手段

2次データ	概念
①体力増強 ②習慣化による自信の獲得 ③イメージと現実のギャップの認識 ④専門分野の勉強 ⑤一般教養の向上 ⑥面接対策 ⑦資格取得の準備 ⑧就職情報の入手	d. 就職対策  e. 目標達成のための知識の取得
⑨ボランティア活動と地域との交流 ⑩同期学生とのフランクな交友 ⑪両親との話し合い ⑫アルバイトを通じた地域社会との接触 ⑬サークル活動による交流 ⑭目標達成に向け集中すること	f. 学友や地域の人々との社会関係  g. 目標達成の心構え

図2. 就職活動期に入る大学生のストレングスの状況



6. 結論

第一次、第二次に分けてデータ分析を行った結果、まず、第一次分析より前研究結果との相違点として以下3点を見出した。

(1) 大学生は精神障害者より具体的な目標達成手段を考慮している。

(2) 日常生活における相談相手として、精神障害者の多くは自身と縦列的關係にある両親や利用施設・機関の専門職員等を選択しているのに対し、大学生の多くは友人、いわゆる自身と横断的關係にある者を選択している。

(3) 目標達成手段として、精神障害者は地域のインフォーマルな社会資源をほとんど活用していないが、大学生はアルバイトやボランティア及びサークル活動等を通して地域のインフォーマルな社会資源を主体的に活用している。

第一次分析の結果より、精神障害者が自己の個人的ストレングスを社会生活の中で表出できずにいる原因の多くは、地域社会との交流や社会参加の機会の少なさに起因するだろうと考察した。つまり、前研究において調査対象とした保健所デイケアを利用する精神障害者の多くは、自身と縦列的に關係にある両親や医療、精神保健福祉サービスの専門職員等との縦列的な人間關係の中だけで生活する傾向にあり、医療機関を退院後もプライベートな時間(余暇)を自身と横断的關係にある仲間、友人の中で生活する時間がほとんどなかった。これらのことが、地域生活を送る精神障害者が地域社会に存在するストレングスの環境的促進要因を活用する機会を持っていないという状況を生じさせる要因となっていると考える。この要因が、前研究結果では地域で生活する精神障害者の環境的ストレングスの弱さとして表れていたものと考察する。

一方、大学生の多くは自己目標に対する多彩な目標達成手段を考え生活していることを確認した。大学生の多くは友人や地域の人々との交流を通して目標に関する情報を取得することを目標達成手段の一つとしていた。また、精神障害者と比べ大学生に環境的ストレングスの要因が多く表れているのは、大学生が友人や地域との社会關係を多く所有していることに起因している。

次に、第二次分析の結果抽出した概念は個人的ストレングスと環境的ストレングスにカテゴリー化でき、C.ラップによるストレングス理論を裏付ける結果ともなった。大学生の目標設定は精神障害者のそれと同様に具体的なものではなかったが、友人や地域とのつながり等のストレングスの環境的促進要因をもとに自身のストレングス(目標達成意欲)を向上させていた。対して、精神障害者の場合は社会的關係の不在、支援スタッフの未充足等の環境的抑圧要因の存在や地域の友人、知人との社会關係の不足等の環境的促進要因の不足が個人的抑圧要因の増加を助長し、彼らのストレングス(目標達成意欲)

の地域社会での表出を減退させていた。

以上の両者間の違いは、今後地域生活を送る精神障害者の生活の質を向上するために、検討、改善すべき要因に相当するものと考ええる。

## 7. まとめ

本調査の結果、「はじめに」で紹介した「自信を失いながらも、社会からの自己肯定感を求めて就労の機会を待つ就職活動期の現代の大学生」に共通する要因をもつと考えられる回答を2名の学生から得た。表3に示すBとIである。BとIは大学4年生の5月の時点であっても両者共に明確な目標を設定できていなかった。よって両者共にその達成手段について考えておらず、目標達成のために特別な活動を展開していなかった。その原因は「自分に合った仕事はまだみつかっていない」、「具体的にやりたい仕事はない」という彼らの思いにあった。ここで、香山がいう大学生の性質と一部異なるのは、BとIは「目標達成に対し自信がない」とは回答していないことである。「目標達成に対する自信」について質問すると、Bは「自信がある」と回答し、Iは「自信があるような、ないような」といった不明確な回答をした。

前研究結果と比較すると、前研究では調査対象とした精神障害者の半数が、目標達成に対し「自信がない」と回答したのに対し（表3）、今回調査対象としたほとんどの大学生が目標達成に対し「自信がある」と回答している（表6、④）。これらは、大学生における環境的ストレングスの環境的促進要因の充足が個人的ストレングスの表出を促進している結果であり（図2）、精神障害者における環境的ストレングスの環境的促進要因の不足が個人的ストレングスの表出を抑圧している状況にある結果である（図1）と考える。

したがって、前述した香山がいう「大学生の自信のなさ」は、大学生における「環境的ストレングス」の弱さの結果生じている現象であるとも考察できるだろう。つまり、大学生の環境的ストレングスを促進する要因は、大学生が自己目標について友人と語り合うことや、アルバイトやボランティア、地域のサークル活動等の地域社会との交流の機会・場をより多く持ち自己目標を意識しながら大学生活を送ることにあるのではないだろうか。以上より、彼らの「自信」の育成を促進する重要要因は、大学生たちが地域社会との交流の機会・場を日常生活においてより多く持つことであると考察する。

同様に、環境的ストレングスの要因が不足する「地域生活を送る精神障害者」が社会生活の中で自己のストレ

ングスを出出できるよう支援していくためには、彼らが医療・保健福祉サービスに限定されない友人や仲間等の地域社会のインフォーマルな社会資源を十分に活用していける環境を整備、開発することが必要だと考える。地域生活を送る精神障害者と地域住民との交流の場、社会参加の場を整備、開発することは、彼らのストレングスの表出の促進を支援する重要要因であるだろう。

地域生活を送る精神障害者が自身と横断的な関係の中で生活できる社会生活の場の整備、開発を行う第一段階として、精神障害当事者同士の仲間づくりを支援することが、地域生活を送る精神障害者のストレングスの表出を支援する上での彼らの環境的促進要因となるだろう。そのうち、セルフヘルプグループやピアカウンセラー等の障害当事者間の相互支援の場である社会資源の開発を行い、それらに対する側面的な育成支援活動を精神保健福祉専門職員らが展開することは、地域生活を送る精神障害者のストレングスの表出を支援していく上で特に意義ある支援活動となるだろうと考察する。

## 8. おわりに

本研究では、「就職」、「自立」という同じ目標を所持するだろうと想定したことで、あえて心身共に健康な大学生のストレングス状況と精神障害者のストレングスの状況を比較し、その相違点より地域生活を送る精神障害者が自己のストレングスを十分に表すことができない要因を考察した。しかし、この比較研究の反省点は、大学生と精神障害者とのライフサイクルの違い、精神的状況の違いを考慮していないことにある。よって、筆者は同様の比較研究を小規模作業所や授産施設に通う他の精神障害、知的障害、身体障害をもつ方々を対象にして行うことを、本研究の課題としたい。

## 参考文献

- 1) 香山リカ：就職がこわい，講談社 東京 2004
- 2) Saleebey, D., "The Strengths Perspective in Social Work Practice", pp. 50-52, 2nd. Longman, 1997.
- 3) Cowger, C., "Assessing Client strengths : Assessment for Client Empowerment " Saleebey , D., ed., The Strengths Perspective in Social Work Practice , p.60, 2nd. ed. Longman, 1997.
- 4) Charles A.Rapp. The Strengths Model , New York , Oxford University, 1998.
- 5) 黒須依子：精神障害者ケアマネジメント論，マスタース・パブリッシング，東京 2002

- 6) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチ，弘文堂，東京 1999
- 7) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践，弘文堂，東京 2003
- 8) Anselm Strauss/Juliet Corbin, 南裕子監訳：質的研究の基礎—グラウンデッドセオリーの技法と手順—，医学書院，東京 1999